５ － Ｎｏ．２１
令和５年 11 月 24 日
茨 城 県 水 産 試 験 場

水　産　の　窓

茨城県で漁獲されるイセエビについて

１ 茨城県におけるイセエビ漁獲量の推移

近年、茨城県ではイセエビの漁獲量が急増しています（図１）。平成初年台には数トンとごくわずかで、平成 30 年までは 20 トン以下となっていました。その後、令和１～３年にかけて大きく増加し、令和３～５年の漁獲量は 40 トンを超えています（令和５年は一部未集計のため、速報値）。

本県では、イセエビは主に固定式刺網（建網）で漁獲されています。固定式刺網とは、海中にナイロン等でできた漁網を設置し、夜行性のイセエビが移動するときに見えない漁網に絡まったものを漁獲するという漁法です。このほか、素潜りなどによっても漁獲されています。

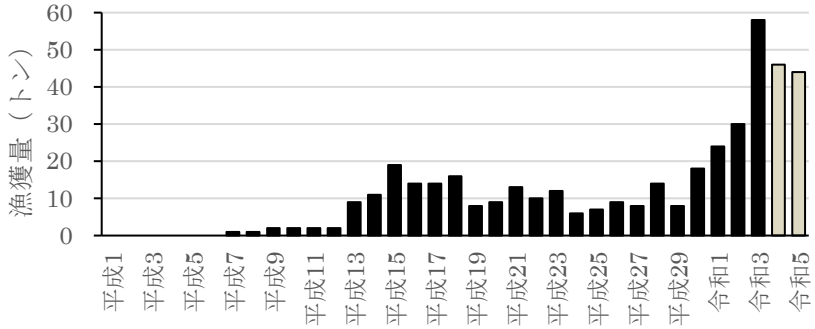

図１　茨城県におけるイセエビ漁獲量（属人）
出典：R3 までは海面漁業生産統計調査（農林水産省）
R4,5 は水産試験場漁獲情報収集管理システム（R5 は一部未集計）

２　茨城県で漁獲されるイセエビの特徴

水産試験場では、急増するイセエビの基礎的な生態情報を収集するため、今年度から市場調査を開始しました。市場調査では、ノギスを使ってイセエビの大きさ（頭胸甲長：目の後ろから頭胸甲の後端までの長さ）の測定のほか、腹肢の特徴などからオスメスを判別し、メスについては抱卵の有無・成熟状況を調べました。

頭胸甲長を測定した結果、本県で漁獲されるイセエビはオスメスともに 80㎜ 前後にモードがあり（図２）、体重に換算するとおよそ 500g であることが分かりました。これは、公表されている他の産地（三重県や千葉県など）のイセエビの大きさ（200～300g 主体）と比べると大きいという特徴が見られました。

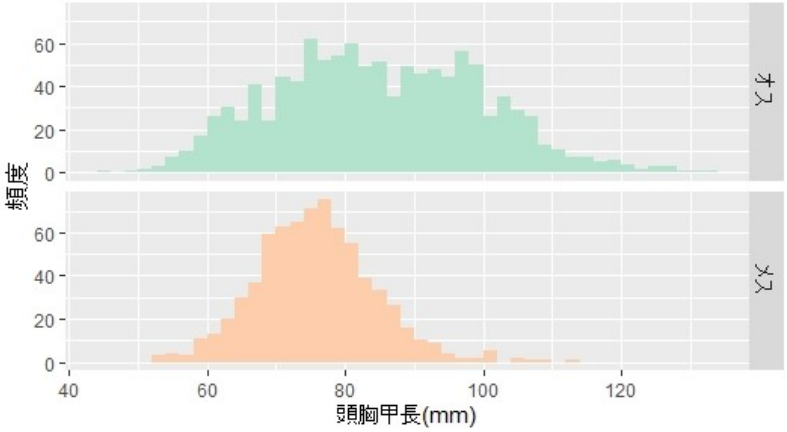

図２　茨城県で水揚げされたイセエビの頭胸甲長組成

また、６～９月のメスの成熟状況を調べたところ、６月には卵を持っているメスが確認されましたが、全て未発眼卵でした（図３）。７月（那珂湊定置平均水温：22.9℃）に入ると発眼卵を持つ個体の割合が増え、８月には産卵後の個体の割合が増加し、９月に入ると再び発眼卵を持つ個体の割合が増加しました。ここから、本県でのイセエビの産卵期は７～９月ごろと推定されました。

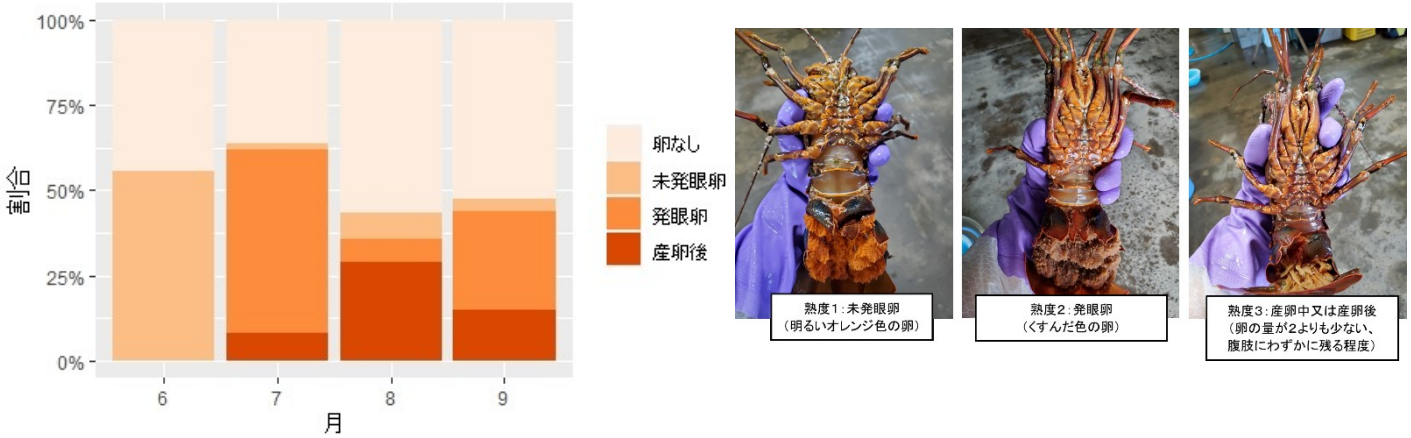

図３　イセエビのメスの成熟状況（左）と成熟度の判定基準（右）

３　イセエビ資源管理に向けた取組

今回の調査により、本県で漁獲されるイセエビはサイズが大きいこと、産卵期は７～９月ごろであることが明らかになりました。本県におけるイセエビ漁獲量が増加している理由は明らかになっていませんが、イセエビ資源の適切な利用に向けて、水産試験場では引き続きデータの収集を進め、本県のイセエビ資源状況の把握に努めていきます。

なお、すでに漁業者の自主的な取組として、抱卵メスの一時的な畜養が行われています。これは、抱卵したメスを産卵が終わるまで海面に設置したいけすやカゴ（図４）に入れておくことで、卵を自然に返す取組です。イセエビの卵や浮遊幼生は、黒潮に乗って沖合域で約１年間浮遊生活を送った後、日本沿岸に着底することが知られています。本県で産卵された卵が黒潮域まで到達するかはわかりませんが、そのまま水揚げしてしまうよりは資源にとってプラスになりますし、歩留まりの向上により販売単価が上がるとの声もあります。水産試験場で抱卵メスを畜養したところ、発眼卵であれば１週間程度で卵がなくなることを確認しています。抱卵メスは脱皮することはなく、一時的な畜養であれば無給餌で問題ありませんので、可能な範囲で畜養後の出荷を推奨します。

図４　一時畜養で使用されるカゴ
（カゴサイズの目安:約 100×100×80cm
収容尾数：50 尾程度）

最後になりましたが、今年度から市場調査を開始するにあたり、各沿海漁協、漁業者の皆さまには大変お世話になりました。来年以降も引き続き調査を行う予定ですので、測定等にご理解・ご協力をいただきますようよろしくお願いいたします。

（定着性資源部　多賀）

【次回予告】令和５年 12 月１日発行の水産の窓は「今季のマダコ漁の予測」を予定しています。